

博物館だより

No.37

平成21年5月1日

みやこ町歴史民俗博物館発行
福岡県京都郡みやこ町豊津1122-13
TEL 0930-33-4666
FAX 0930-33-4667



▲吉田増蔵関係資料：増蔵が水哉園在籍中に作った漢詩

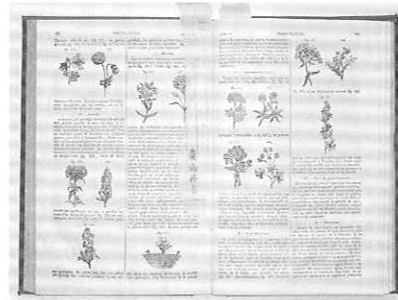
当館では現在、みやこゆかりの先人展「吉田健作と吉田増蔵」展を開催中です(6月7日まで)。吉田健作・増蔵兄弟は、みやこ町勝山の出身で、兄健作は近代製麻業の発展に尽力、弟増蔵は元号「昭和」を創案するなど、いずれも近代日本の進展に大きな足跡を残しています。とくに弟増蔵に関連する近年の昭和回顧ブームや先頃行われた吉田学軒顕彰祭(「学軒」は増蔵の号)にみられるように、彼ら兄弟への関心や注目度が高まっている現在、本展はその業績について知る格好の機会となるはずです。今回展示中の資料約250点の多くが初公開となります。ぜひご来館下さい。

みやこゆかりの先人展 近代「製麻業」創始の兄

元号「昭和」創案の弟

吉田健作と吉田増蔵展

4月28日(火)～6月7日(日)



▲吉田健作関係資料：農商務省官僚の時代に製麻業資料として入手した専門書

■観覧料

・常設展の観覧料でご覧いただけます

■主な展示資料

- ・吉田増蔵墨蹟(書幅)
- ・大久保利通墨蹟(書幅)
- ・「日本製麻史」草稿

5月期歴史講座のご案内

【漢詩文講座】

5月2日(土) 9時30分～

【古文書講座】

5月9日(土) 10時00分～

【古典かな講座】

5月16日(土) 9時30分～

【金曜古文書講座】

5月22日(金) 10時00分～

【みやこ学講座】

5月23日(土) 10時00分～



▲弥生時代についての学習。ケースをのぞきこむみんなは熱心にメモをとっていました

4月の活動日誌から

4月21・22日、豊津小学校で出前授業を行いました。5年生を対象に「古代の火おこし」を体験してもらいましたが、皆さん最後は見事に発火成功!

4月22日、節丸小学校6年生の皆さんが来館し、歴史学習を行いました。校区にある節丸西遺跡などの説明を受け「身近なところに遺跡があるなんてびっくり!」とふるさと再発見の様子でした。



▲起こした火を復元した古代かまどに移し、ごはんづくりも体験しました

《古文書解読コーナー》

①

ねん

② 〈ヒント〉 目上の人から物をもろう

ちん

③ 〈ヒント〉 呼びかけに答える

酒

④ 〈ヒント〉 みちたりの

祝

⑤ 〈ヒント〉 結婚式

大

〈ヒント〉 おおきなよろこび

◎ 答え

(反対向きに見てください)

- ① 祝言
- ② 大慶
- ③ 足踏
- ④ 酒
- ⑤ ねん

みやこの歴史発見伝 26

近代「製麻業」創始の兄

元号「昭和」創案の弟

吉田健作と吉田増蔵

吉田健作・増蔵兄弟

「平成」という元号に改まり、今年で二十余年が経ちました。「昭和」という響きが遠い過去のように感じる昨今ですが、この「昭和」という元号を創案した吉田増蔵はみやこ町勝山の出身で、彼の兄、吉田健作は近代製麻業の創始者として大きな足跡を残した人物です。

吉田健作は嘉永五年（一八五二）増蔵は慶応二年（一八六六）に京都郡上田村（現みやこ町勝山上田）で父温次、母イツ（現みやこ町犀川山鹿出身）のあいだに生まれました。父温次は「水哉園」（村上仏山の開いた私塾）に学び漢詩に長けた人物で、兄弟は父同様、水哉園に入門しています。兄健作は末松謙澄（現在の行橋市神田出身、後の内務大臣）と大変仲が良く、共に勉



▲吉田健作



▲吉田増蔵

学に励み、増蔵はこの頃から既に漢学に秀でていたと伝えられています。

日本製麻業の父・吉田健作

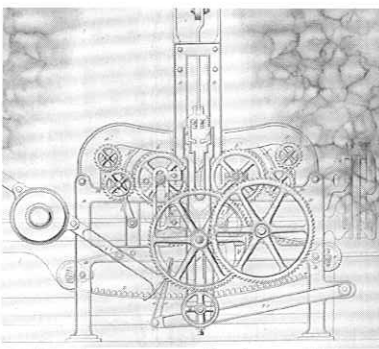
吉田健作は明治八年（一八七五）二四歳の時に上京し農学を学んだ後、内務省に勤めました。殖産指導の技術者として働く傍ら、産業振興及び国力の充実に紡績業、特に日本の氣候・風土に適した製麻業の振興が急務であると考え、亜麻栽培・製麻法についての研究に没頭しました。明治十一年（一八七八）にはパリ万国博覧会見学及びヨーロッパ各地の産業状況調査のためフランスに渡りますが、この時、日本がヨーロッパに比べ想像以上に遅れているという現実を目の当たりにします。そのためフランス北部のリー

ル市にある亜麻栽培農家に入り、昼間は製麻技術、夜はフランス語、機械工学、製図等について寝食を忘れ勉強します。

明治十四年（一八八二）、健作三〇歳のときに帰国。その後、製麻工場設立のため献身的な努力を重ね、明治十九年（一八八六）一月二二日、日本初の製麻工場が現在の滋賀県大津市に完成しました。これに続き明治二三年には北海道と栃木県にも製麻会社設立され、日本の製麻業は発展の緒に就きました。しかしフランス滞在中の無理がたため喘息を患い明治二十五年二月五日、四二歳の若さで逝去しました。

「昭和」の創案者・吉田増蔵

吉田増蔵は明治十六年（一八八三年）に上京後、共立学校（現開成中学・高等学校）に入学し、英語を学んだ後、アメリカに渡りま



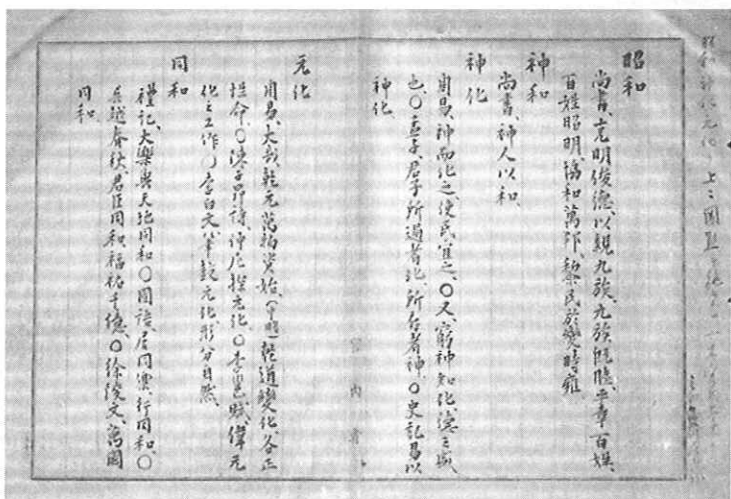
▲健作がフランスより持ち帰った機械図面

宮内省図書寮 編修官となりま

したが、この時、同省図書頭の森鷗外と出会います。鷗外は作家としてだけでなく漢学者として元号の研究も行っていました。

増蔵は、その鷗外が漢学の才能を認められた唯一の人物ですが、この事は、鷗外が死に際して貴重な和漢の蔵書を「吉田増蔵君に送るべし。吉田君の外善く之を用ふるものなし」と遺言状に書き残している事からも伺えます。鷗外は増蔵に元号の研究を託し志半ばで亡くなりました。そして大正天皇崩御に際し、宮内大臣の命を受け新元号の草案（神化、元化、昭和、神和、同和、

継明、順明、明保、寛安、元安）を作成。国府種徳案（内閣案）の五案とともに提出され、大正二五年（一九一六）二月二五日の枢密院本会議において新元号が「昭和」に決定しました。「昭和」は中国の書経の「百姓昭明 共和萬邦」（全ての人民は明るく、全ての国は和やかなの意）から考案され、世界平和の意味が込められたもの



▲吉田増蔵が考案した大正に次ぐ元号の草案

でした。

その後は宮内省御用掛となり現在の天皇陛下下の称号「継宮 明仁」をはじめ、「秩父宮」など宮号、親王・内親王の称号、詔勅類の創案にも携わりました。しかし元号に定められた願いも空しく、増蔵は太平洋戦争の開戦に先立つ「米国及英国に対する宣戦の詔書」の起草を手がけることになりました。しかしこの時既に胃潰瘍を患っており、昭和十六年（一九四二）二月一九日に東京の自宅において、七五歳の生涯を閉じました。

（井上信隆）